2022年6月26日（日）主日朝礼拝説教

『天の光を見たのです』　井上隆晶牧師
使徒言行録26章12～18節、Ⅰコリント15章1～5節

❶【パウロを変えた体験】

パウロは元の名をサウルといいます。ユダヤ教の中の厳格なグループであるファリサイ派に属していました。イエス様たちの群れはユダヤ教の中では「ナザレ派」と呼ばれており、パウロは彼らのことを異端だと思っていましたから、キリスト教徒たちを迫害し、牢に入れ、彼らが死罪になるのを喜んでいました。彼は更に手を伸ばし、ダマスコにいるキリスト教徒を迫害する為に町に向かっていました。その途中、彼は太陽よりも明るく輝く光に照らされて倒れ、目が見えなくなりました。雷が落ちたのだと解釈する人もいますが、ただの光ではありません。パウロが言うように「**天からの光**」（神的な光）でした。なぜなら光と共にキリストの声を聞いたからです。光は全ての人を照らしたのですが、パウロだけが声を聞きました。それは「**サウル、サウルなぜ私を迫害するのか。とげの付いた棒をけると、ひどい目に遭う。**」（使徒26：14）というものでした。とげの付いた棒をけると怪我をします。そのように、キリストに逆らっても勝てない、という意味です。パウロがあなたはどなたですかと聞くと「**私はあなたが迫害しているイエスである。起き上がれ。自分の足で立て。私があなたに現れたのは、あなたが私を見たこと、そしてこれから私が示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人にするためである。**」（同26：15～17）と言われました。つまり彼は、復活したキリストを見、その声を聞いたのです。今まで復活について信じてきたけれども、本当に復活した者を見たことはありませんでした。ところが彼はそれを見たのです。これで彼は変わりました。この時の体験を使徒言行録は三回（9章、22章）載せています。それほどこれが彼の信仰の土台であったことが分かります。

❷【出来事がいつも先にある】

このパウロの体験から二つの事を学びましょう。まず第一に、信仰にはまず神の出来事が先にあるという事です。パウロはアグリッパ王に「**王よ、私は天の光を見たのです。**」（使徒26：13）といい、ペトロとヨハネもユダヤの議会で取り調べを受けた時、「**私たちは見たことや、聞いたことを話さないではいられないのです。**」（使徒 4：20）といい、更にペトロは「**私たちは巧みな作り話を用いたわけではありません。私たちは、キリストの威光を目撃したのです。**」（Ⅱペトロ 1：16）といいました。キリスト教とは人間による思索や哲学や作り話ではありません。まず、神の一方的な「救いの出来事・神の業」があるのです。それは聖書を貫いていることです。出エジプトでもそうです。神がまず一方的にイスラエルをエジプトから救います。そこから信仰が出ます。復活信仰もそうです。「**本当に主**

は復活して、シモンに現れた」（ルカ 24：34）とあるように、本当にキリストは復活して現れたのです。そこから人に復活信仰が生まれるのです。始まりはいつも神様です。私たちではありません。だから皆さんが、信者になったということは、気がついていないかもしれませんが、皆さんの人生の中にキリストが現れ、触れられ、何らかの救いの出来事をされたということなのです。
二つ目は、人は神に出会って変われるという事です。迫害者であったパウロは一瞬にして信仰者になりました。これはまぎれもなく彼の力ではなく、神の力です。神がパウロを変えました。これがキリスト教のすごさです。**昨日まで悪人であった者が、今日は善人に変わるということがありうるということです。だから希望があるのです。人は自分の力では変われませんが、神の力で変われるのです。**人に変わって欲しかったら、説得したり、責めたりするのではなく、神に祈ることです。それは自分に対してもそうです。自分の力だけでは変われません。「私を変えて下さい」と神に祈るのです。

●心の友伝道という活動があります。その中に「誰かが祈ってくれている」という題の記事がありました。「音楽会の案内だと間違えてキリスト教の伝道集会に参加したのは私が 19 歳の時でした。後で分かった事ですが、さりげなく、その伝道会のチラシを渡して下さった老婦人は、私の救いのために二年間も祈ってくださっていて、その一枚のチラシには、青年の救いを願う熱い祈りが込められていたのです。60 年前、訪問伝道の奉仕に加わった時、岡田牧師が繰り返し強調したのは、執り成しの祈りを忍耐強く続けるという事でした。」だから、特に信仰を持つことに対しては、神に期待して諦めないで祈り続けたいと思います。

❸【神が自分を現わされる～啓示について～】

神は普段はその姿を隠しておられますが、人に自分のことを教えようとして姿を現わしたり、語りかけることを「**啓示**」といいます。神は全ての人には現れません。イエス様が復活した時も、一部の弟子たちだけに姿を見せました。神は人を選んでおられます。神は全知なるが故に、ある人が自分を信じることを知っておられ、時と場所を定め、現れ方も限定して、その人の受容能力に従ってその姿を現されます。よく「姿さえ見せてくれたら信じるのに」とか「具体的な言葉さえ聞かせてくれたら信じるのに」という人がいますが、ユダヤ人がそうであったように、いくら奇跡を見ても信じない人は信じません。もしすべての人に姿を現したのに、その人たちが信じなかったとするなら、神秘を冒涜した者として裁きを受けることになるでしょう。多く与えられた者は多く求められるからです。だから神はある人を選ぶのです。また、一人の人にすべてを現わしたり、すべてを教えることもしません。それは人間には耐えられないことだからです。500CC のビーカーに海の水をすべて入れるようなものです。また、もしそんなことをしたら、自分だけが真理を知っており、自分だけが真理の保持者だと驕り高ぶって他者を見下し、せっかく与えられた宝を無駄にしてしまうことになるでしょう。だから

神は、多くの人に少しずつご自分を現わし、現わされたもの、教えられたものを皆が持ち寄って、学び合うようにされたのです。こうやって神の啓示を集めたものが聖書なのです。

❹【神が自分にしてくださった恵みが見える人になりなさい】

自分に現れた神によって、パウロは自分の今までの聖書に対する認識、信仰の内容が間違っていたことを知りました。正しい信仰は神によって与えられるものです。人間の中からは真の信仰は出てきません。統一協会は私たちと同じ聖書を使いながら、まったく違うメシア像を造り出し、それを信じました。神から来た信仰だけが最後まで残ります。神から出たものは永遠に残るからです。私たちが善かれと思ってしたことも、もし神の御心と一つになったものなら残るでしょうが、そうでなければ、必ず消えてゆくでしょう。

1 コリント 15 章でパウロがコリント教会に伝えた信仰とはキリストの十字架、葬り、復活です。これは使徒信条、二ケア信条の内容と同じです。これは神キリストが私たちにされたことであって、人間のしたことではありません。神が皆さんにして下さったことは永遠に残るでしょう。すなわち、皆さんのことを愛されたこと、それゆえ罪を負われたこと、皆さんを洗い、御自分と一体にされたこと、皆さんに死なない体を造って下さったことです。それだけで人は生まれてきた意味があるのです。天国に行った時に、神が自分にして下さったことが大きく見える人は幸いです。しかし神が自分にして下さったことが見えず、自分のしたことばかりを話す者は不幸です。聖書の中に「**主よ、私たちはあなたの御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡をいろいろ行ったではありませんか**」（マタイ 7：22）という人に向かって「**あなたたちのことは全然知らない**」と言われたのを思い出してください。

●藤尾正人牧師はこんなことを言っています。「億兆という巨大な数も、一とか二とかいう小さい数も、無限大の前にはゼロであるのと同様、神の前では人間が何をしたかは無に等しいのです。ただ、キリストがなしたまいし大いなる十字架と復活のみが、その時輝くのです。…」

●朴栄子（パク・ヨンジャ）牧師のお父様は生涯現役の牧師として、講壇で死ぬのが夢でしたが、74 歳で末期の大腸癌が見つかり、在宅ホスピスをすることになりました。食事を口から味わうこともできず、入浴も排泄もすべて人まかせの生活になった彼にとって、デボーションは何よりの楽しみでした。一日のうち、いちばん穏やかでホッとする時間です。天国に召される少し前に、み言葉を聞いて「ああ、美味しい。蜂蜜のように甘いなあ」と言われました。召される日も、家族が朗読する聖書を聞いて、読み終えると「アー」と応答して、1 時間の後に眠るように静かに息を引き取られたそうです。

デボーションは何よりの楽しみで、一日のうち、いちばん穏やかでホッとする時間というのは良く分かります。それは天の国の一日だからです。神の言葉や、神が私たちに約束して下さったこと、実際にして下さったことが蜂蜜のように甘く感じる人は幸せです。どうかそのような信仰を身につけたいと思います。